



須藤 眞志著

真珠湾「奇襲」論争：陰謀論・通告遅延・開戦外交

講談社 2004



1941年12月に起こった日本軍による真珠湾攻撃はあまりにもあざやかな成功をおさめたので、アメリカ側はあらかじめ日本の攻撃を察知しており、ルーズベルト大統領は真珠湾をおとりにして日本の攻撃を故意に許したのではないかという、いわゆるルーズベルト陰謀論なるものが日米開戦まもなくから日米双方にある。正統な歴史を覆す議論を歴史修正主義(リビジョリズム)というが、それがしばしば陰謀論と結びつく。たとえばケネディ暗殺事件は、アメリカ政府の公式発表では、ある男の単独犯行ということになっているが、実は背後に巨大な陰謀が企まれており、それを政府は隠蔽しているという陰謀論の方が一般には信じられている。だが、歴史学でもっとも重要なことは、それを証明する証拠である。さしたる証拠もなく、あるいは石器捏造事件のように証拠を捏造して歴史を書き換えようと試みる人はいつの時代にもいるが、多くは推論を重ねたものが多く、よくよく吟味しないと大変危険な議論がほとんどである。

真珠湾攻撃は20世紀最大の事件とも言われているので、それにまつわるさまざまな論争があり、現在に至るも論争が絶えない。その一つがルーズベルト陰謀論である。そのような本がアメリカで出ると、やはりルーズベルトはすべてを知っていたのかと日本の陰謀論者が大喜びするという不思議な現象が起こる。簡単な議論は、もしルーズベルトが攻撃をあらかじめ知っていたのならば、待ち構えていればよいのであってなにも日本の攻撃を許すことはない。だが陰謀論では故意にそうせず3千名の将兵を犠牲にしたというのである。日本側から見ると、そうならばこれは日本の卑怯な奇襲攻撃にはあたらないということらしい。

そこで陰謀論者たちは、ルーズベルトがいかに密かに真珠湾攻撃を知っていたのかという証拠探しに懸命になる。その一つが日本の外務省や海軍の暗号電報が解読されていたことである。それは事実であるが、海軍電報が解読されるのは真珠湾攻撃の後で

あり、「新高山のぼれ」(攻撃命令)が出されるのは12月2日であるが、その前にそれが解読されたという事実はない。また、攻撃に向かった機動部隊は無線封止を厳重に守っており、それ故その位置が発覚することはなかった。そのほかソルゲのようなスパイからソ連に情報が伝えられ、それがアメリカに伝えられたとする説もある。だが陰謀論を主張する論者たちの証拠はいずれも極めて根拠が薄弱であり、陰謀論を証明するものにはなっていない。本書はそれらをすべて論破するもので、真珠湾攻撃は立案した山本五十六の大作戦が見事に成功したのであって、決してルーズベルトの陰謀などではなかったというのが結論である。

陰謀論の方が一般的に多くの読者の興味を引くかもしれないが、歴史は証拠に基づいた事実が重要であり、学問をそのような興味本位にすることは邪道である。

また、日本の最後通告が攻撃の50分も遅れたのは事実であるが、それも真珠湾の奇襲を成功させるために故意に遅らせたのではない。本省と出先大使館のコミュニケーションが不十分であったために起こったのである。そこにも何か陰謀めいたものは見出せない。

日米戦争という悲劇的なことがなぜ起こったのかを再度考え、そのような愚かなことを二度とおこさないためにも、日米開戦外交を再考する必要がある。21世紀になっても戦争は絶えないが、戦争の好きな人はほとんどいないのである。平和を考えるうえで本書が多少ともその手助けになればと思い執筆した。残念ながら、いまのところ陰謀論者たちからのこれといった反論はない。

(すどう しんじ 外国語学部教員)



カット 美術部3年生 辻 智貴

植村 和秀著

丸山眞男と平泉澄：昭和期日本の政治主義

柏書房 2004



なぜ昔の人たちは、あれほどまじめに政治に向かったのか。これがこの本の隠された主題です。ただし、まじめに向かうことに対して、私は距離を置いた立場を取っています。ほめもせず、けなしもせず、ただ理解する、というのが私の立場です。

丸山眞男は、戦後民主主義の良心と呼ぶべき人で、広い意味での左翼の立場の代表者の一人でした。これに対して平泉澄という歴史家は、戦前から戦後の国家主義運動の良心と呼ぶべき人で、広い意味での右翼の立場の代表者の一人でした。この二人の主張は正反対で、丸山は国民主権を擁護して、急進的な民主主義を主張しますし、平泉は天皇主権を擁護して、皇国史観に立脚した国家主義を主張します。きわめてまじめに政治に向かったという以外に、二人の共通点はたしかに見当たりません。

しかし、この本の取り上げるのは、まさにこの点です。あれほどまじめに政治に向かうことに、私は合点がいきませんでした。丸山にも平泉にも、そして彼らに心服して従おうとした人たちの心持ちも、私には合点がいきませんでした。そこで書き下ろしたのがこの本です。なぜ昔の人たちは、あれほどまじめに政治に向かったのか。それを私は、丸山と平泉という、左右正反対の二人の内面から、多少なりとも明らかにしようとしたのです。

私の結論はこうです。二人がまじめに政治に向かったのは、政治理念によって自己形成しようとしたためであった。つまり、自己の個性を調和的に発展させるべきだ、という教養主義の理想が、政治的対立の激化した時代に政治主義化した、ということです。「政治主義」という呼び方は、まだ熟してはいません。政治理念の実現に生の意味を見出し、政治的なものが結果として優先されるべきとなることへの違和感、ということです。

もちろん、20世紀は世界の多くの地域で、政治の時代でした。様々な政治的な主義主張が、多くの人たちの心を捉え、多くの人たちの人生を動かしていきました。ただ日本においては、そこに教養主義的な色合いが強く出て、自己形成への脅迫心理が強

かったように思います。丸山と平泉の生涯は、そのような政治主義の清きもの、そのような教養主義の実現例だったと言えましょう。二人への多くの人たちの憧れは、そのために思われます。

それなのに私に憧れないのは、時代が変わったからかもしれません。尊敬はしますが、憧れはありません。それは多分、自己形成のため常に努力せねばならぬ、という教養主義の理想が、私の中になからだと思えます。そしてまた、政治に参加して自己形成せねばならない、という心理も私にはありません。もちろん、政治学者ですから政治に関心はあります。しかし、それは政治の具体的な問題への関心であって、政治それ自体に意味を読み込もうとするものではありません。そのような心持ちは結局、自己形成ではなく自分探しの、良く言えば自己表現の時代のものなのでしょう。

この本は、丸山論であり平泉論であり、そしてまた、日本ナショナリズム論、終戦史論でもあります。でも結局、昭和論と言うべきものになりました。なお、本の最後に触れました文化主義の可能性については、機会を改めて詳述する予定です。

(うえむら かずひで 法学部教員)



カット 美術部2年生 米澤 学



矢野 道雄著

星占いの文化交流史

勁草書房 2004



本学の創立者である荒木俊馬先生は天文学者として有名で、多くの論文や著書を残されたのは周知のとおりですが、歴史にも並々ならぬ関心をもっておられました。このことは『西洋天文学史』(恒星社厚生閣、1965年)という著書にみることができます。この書の少し前には『西洋占星術』(恒星社厚生閣、1963年)という本も著しておられます。この本の序文で先生は、「中世西洋史の研究は占星術の知識なしには理解に困難な点が少なくない」、「西洋占星術は天文学とともに発達し、同時にまた占星術が天文学の研究を促進した功績も少なくない」と述べ、占星術を「迷信だと思っている」といしながら、その歴史の研究が必要であることを力説しておられます。つまり、現在からみれば迷信であっても、迷信とは考えられていなかった時代もあったわけですから、そのような時代の「科学」あるいはもっとひろく、「学問」として占星術は研究の対象になるのです。

わたしは最初はインド哲学史を勉強していましたが、そのうちインドの科学に関心の中心が移り、結局はインドの天文学と数学の歴史を専門とするようになりました。はじめのうちは占星術には全く関心がなかったのですが、インドだけでなく古代・中世全般において、天文学と占星術は切り離すことができないということがしたいにわかってきました。とくに、わたしが翻訳したノイゲバウアーの『古代の精密科学』(恒星社厚生閣、1984年)からは多くのことを学びました。そして荒木先生と同じように、占星術を信じないという立場をとりながら、その研究を続けてきました。その結果『密教占星術』(東京美術、1986年)や『占星術師たちのインド』(中公新書、1992年)などの本を出しました。前者は平安時代に流行した宿曜道の起源を明らかにしたもので、後者は現在のインドで行なわれている占星術と古い文献に見られる占星術とを照らしあわせたものです。

今回の本では、「目次」を見ていただくとおわかりのように、対象となる文化圏をユーラシア大陸全体に広げ、メソポタミアから始まった占星術が、ギリシア、ヘレニズム、インド、イラン、中国、日本、イスラームの文化圏に伝播し、変容していった様子を、具体的な例をあげながら説明しました。文化交流の材料としては、建築、絵画、食物、物語、音楽などさまざまなものがあります。最近ではスポーツや映画、アニメなども重要です。このような材料と並んで重要でありながら、あまり研究されていなかったのが、近代以前の科学の歴史です。とくに占星術は「疑似科学」と呼ばれ、なんとなくうさんくさいところがあるので、まともに取り上げられることが少なかったのです。わたしは占星術を含む広い意味での科学の歴史を歴史学の中にしっかりと位置付けたいと思っているので、この本が書店の「占い」のコーナーではなく、文化史や科学史の棚に置かれているのを見てうれしく思いました。

<目次>

- 第1章 バビロニアから日本まで
- 第2章 占星術のはじまり
- 第3章 ヘレニズムの占星術
- 第4章 地中海からインドへ
- 第5章 サーサーン朝ペルシア
- 第6章 インドから中国へ
- 第7章 中国から日本へ
- 第8章 イスラーム世界の占星術
- 第9章 ジャイプルの夏

(やの みちお 文化学部教員)



所 功著
近現代の「女性天皇」論



展転社 2001

近年、わが国では、核家族化・少子高齢化が進み、また夫婦平等意識・男女共同参画政策の普及などに伴い、家族や氏姓の在り方が問い直されている。それは、他人にとって些細なことかもしれないが、当事者には一大事なのである。

そうであれば、まして現行の『日本国憲法』にも「日本国の象徴であり日本国民統合の象徴」「皇位は世襲」と明記される天皇制度を未永く維持してゆくことは、皇室の方々だけでなく、全国民にとって重大な関心事であろう。ところが、憲法に基づいて皇位世襲の資格や順位などを定めた『皇室典範』は、戦後半世紀余りの間に一度も見直しが行われていない。最近やっと政府の諮問機関が設置され、今秋までに有識者会議の答申をえて、改正法案が来年の国会で審議の運びになるという。

しかし、皇室問題は、当面の皇位継承問題に限っても、十分に時間をかけて論議を尽くし、長期的な対応策を立てる必要がある。そこで、かねて「女性天皇」条件付き賛成論の私は、数年前から明治以降の『皇室典範』論議に関する資料と研究文献に検討を加え、それを「女性天皇」論に絞って雑誌『AURORA』『比較法史研究』『産大法学』などに発表した。さらに平成13年(2001)11月、それらを纏めたのが本書である。内容は3部から成る。

明治前期の「女性天皇」論(1 新旧皇室典範の類似点 2 民権論者等の女帝可否論 3 井上毅の女帝否定の論旨)

昭和戦後の「女性天皇」論(1 新典範制定過程の論議 2 施行後の国会内外の論議 3 法学者・歴史家等の論議)

参考資料(1 歴代天皇と后妃の略系図 2 小中村清矩博士『女帝考』 3 法制局「皇室典範案に関する想定問答」)

ご覧の通り、従来の論議を整理し主要な資料を紹介したものにはすぎない。ただし、「女性天皇」について論ずる人々は、せめてこれらの基本文献をふまえ、正確な発言をしてほしいと念じている。とくに2では、古来の女帝全員の的確な解説が示されて

おり、また3では、現行典範の全条文に関して、予想される質疑と応答が網羅されているから、参考となるにちがいない。

さて、今後「世襲」天皇制度の安定的な永続に向けて、現行典範を改正するポイントは、少なくとも皇族女子が、一般男性と結婚した後も「女性宮家」を創立され、皇族の身分に留まれるようにすること(第12条の改正)、後継者のおられない宮家には、現天皇と血縁の近い元皇族の子孫などが「養子」に入り、宮家を継承できるようにすること(第9条の改正)、そうしても男子皇族が誕生されとは限らないので、皇位継承の資格を皇族女子にも広げること(第1条の改正)が不可欠であろう。

ただ、その継承順位は、従来の直系・長系・長子の三要件を優先する原則をふまえたうえで、A男子優先(イギリス・デンマーク・スペイン型)とするのか、B男女平等(スウェーデン・ベルギー・オランダ型)とするのか、の選択は慎重に議論する必要がある。何となれば、この問題は、単に天皇が男性か女性かだけでなく、その配偶者にふさわしい人物がえられるか、両陛下をはじめ全皇族が互いに協力して多様な公務を果たせるかなど、皇室の全体像に深く関わるからである。

なお、拙著以外に、笠原英彦氏『女帝誕生』(平成15年6月)など数冊の関係書が出ている。また、下記の拙稿なども参考にしながら、議論を深めていただきたい。

『皇室典範と女帝問題の再検討』(平成14年3月 国民会館講演叢書)

「皇室典範と女性天皇の新論点」(平成14年10月 新人物往来社『歴代皇后系譜総覧』)

「“皇室の危機” 打開のために 女性宮家の創立と帝王学」(『VOICE』平成16年8月号)

「最近の“女性天皇” 論議」(『歴史研究』平成17年3月号)

「皇位の男系継承史と女系容認論の検証」(『歴史読本』平成17年5月号)

(ところ いさお 法学部教員)